



現代日本文學大系

55

宮本百合子 集  
小林多喜二



筑摩書房

現代日本文學大系 55

昭和四十四年十月二十五日

初版第一刷発行

昭和四十六年四月二十五日

初版第二刷発行

宮本百合子・小林多喜二集

著者

宮本百合子

発行者

小林多喜二

発行所

筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号一〇一―九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四二二三

印刷

精典社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

(分類) 0393 (製品) 10055 (出版社) 4604

宮本百合子集 目次

卷頭写真  
筆蹟

伸子

小祝の一家

広場

風知草

同志小林の業績の評価に寄せて

冬を越す蕾

歌声よ、おこれ

三

一七

一八

一八

二四

二七

三三

小林多喜二集 目次

卷頭写真  
筆蹟

防雪林

二二九

滝子其他

二六四

一九二八年三月十五日

二九三

蟹工船

三三七

党生活者

三七〇

〔付録〕

宮本百合子——その生涯と作品

本多秋五  
四一五

小林多喜二と宮本百合子

藏原惟人 四三

小林多喜二——死とその前後

手塚英孝 四三

「一九二八・三・一五」と

「蟹工船」について

藏原惟人 四五

『蟹工船』の勝利

勝本清一郎 四三

年譜

四六

著作目録

四五

宮本百合子集

風知草 (一)

空を飛ぶるわさぎ

武蔵野の雑木林の間に建てる水たまりの研究所	ともの上の十月下旬の光線が落ちておた。	る。透明なかけとみうるがラス	るものわらわらないがうすのくねった	のせら水てぬる。名の。そして何に使ゆ水	験管。トリカス。フラスコ。ふたつき	大きな実験用テーブルの上には無数の試
-----------------------	---------------------	----------------	-------------------	---------------------	-------------------	--------------------



伸子は両手を後にまわし、半分明け放した窓枠によりかかりながら室内の光景を眺めていた。

部屋の中央に長方形の大テーブルがあった。シャンデリアの明りが、そのテーブルの上に散らかっている書類——タイプライタアの紫インクがぼやけた乱暴な厚い綴込、隅を止めたピンがキラキラ光る何かの覚え書——の雑然とした堆積と、それらを挟んで相對し熱心に読み合せをしている二人の男とをくっきり照して、鼠色の絨毯の上へ落ちてゐる。

部屋じゅうを輝かす灯が単調であるとお、二人の男の仕事も単調でつまらなかつた。ホームスパンの服を着た、浅黒い瘦せた男が左手に綴込を持ち、眼をくばり、頁をめくり、どんどん桁の多い数字を読みあげて行く。向い合つて、伸子の父の佐々が椅子に浅くかけ、青鉛筆を持って油断なく数字をチェックしていた。彼は品のよい縞の交り襟のついたスモーク・ジャケットを着けていた。くつろいだなりにも似合わず、彼はもう三十分以上その忙しい、機械的な仕事に没頭してゐるのであつた。

傍観している伸子には、仕事の内容も、今それをしなければならぬ必要も解つていなかつた。彼女がおとなしく窓際にしりぞいて眺め

ているのは、主として、子供のうちから父の多忙な時決して邪魔はできないものと観念している習慣によるのであつた。けれども、彼女はだんだん彼らの活動の調子につりこまれて行つた。強くも弱くもならない平らかな声が早口に、

「二七七〇二六〇。五九三〇三〇四二七……」

勤勉な紡錘の唸りのようだ。それにつれ、佐々の青鉛筆はほとんど自動機的敏活さでさっさささつと、細かく几帳面に運動する。そこに自ら独特のリズムが生じた。じつと見守つてゐると、機械の規則正しい運転が人の心を与える、力強い確乎とした、同時に精神的な亢奮に似たものを感じるのであつた。

彼らは一息にふた綴大判の綴込をかたづけけた。そして少しのろろと、三つめの薄い覚え書を読み合せてしまふと佐々は、いかにも重荷の下りた風で、

「やあ、どうも御苦勞様でした」

と、頭を下げ椅子をずらした。

あたりには、一時に緊張の緩みが来た。伸子まで何となくほつと、俄かに外界の騒音が自分の背後から幅広く押しつけてくるのを感じた。丁度晚餐後、人の出さかる最中だ。彼女らのいる五階の真下に横たわるブロードウェイからは、絶間なく流れる無数の人間の登音、喋り声、笑い声などが溶け合い混り合い、とりとめのない雑音の濃い瓦斯体となつてのぼつて来た。夜の空まで瀾漫する都会の巨大などよめきを貫いて、キロロロロ……と自動車の警笛が聞えた。燈柱の下で夕刊を呼び売する子供の「パイバア、パイバア」と云う甲高い声がとぎれとぎれ聞えて来る。——ホームスパンの男は、手早く書類をまとめて、自分の黄色い手提げ鞆にしまった。そして、二言三言佐々と話し、伸子に遠くから挨拶すると、遽しく気取つて出て行つた。佐々は戸口までその男を見送つた。

戻つて来ると、彼はうまそうに葉巻の煙を吹いた。「さて——そろそろ出かけますかな」

伸子は窓際を離れ、傍の長椅子に来てかけながら、訊いた。

「ほんとにいらっしやるつもり？」

「どうして？ お前も行くんだらう？ そう返事をしてありますよ」

「私——やめたいわ」

「なぜ？」

「くたびれているの。——それに……あまり面白くもなさそうじゃないの」

「ふむ……」

佐々は、暫く黙って自分の吐く煙を眺めていたが、やがて徐ろに云った。

「着物なんぞはそのままで結構なんだからおいで。——行けば何かしら行っただけのことはあるものだ。それに儼のいるうちでできるだけ人も知って置かないと、いざという時一人で困るよ」

今夜、彼女は父と二人、日本人の学生倶楽部で催されるある集り、茶話会のようなものに招かれていた。最近故国から来た某文学博士を中心として打ちとけた集りをするという案内を貰っていたのだが、伸子は一向好奇心が起らなかった。彼女自身も紐育には新米の旅客であった。彼女は、午後独りで勝手の不確かな下街に買物に出かけ、神経を疲らせて帰った。夜まで行儀を守って人なかにいなければならぬのは、彼女に少しうんざりなのであった。けれども健康で活気がある佐々は、伸子の引っ込み思案を多くの場合うけつげなかつた。彼は、六十歳に近い老人と思われない活潑さで、いつも伸子を引き廻した。それには、自分が滞留しているうちに、地理も覚えさせ、交友もこしらえて置いてやろうという心遣いが潜んでいるのは明かであった。彼は会社用の事、僅か三箇月ばかり、この都市に來た。彼が帰ってしまえば伸子は独りでいのこる予定であった。彼女は旅行の間、大抵いやでも父が行く処へはついて歩いた。市役所から、ある大銀行の金網の裡で、人間が金貨の山に埋まり血の氣のない指で金勘定をしている、空氣の流通のわるい暑い部屋の中まで。土地不案内な、これという定

った目的ももたない伸子は、また、そうでもしなければ一日が永く、捨てられた石のように退屈したに違いない。

今も彼女は確かに行きたくはなかつた。けれども、父が出たあと、ぼつたり独りでホテルの部屋に十二時頃まで閉じ籠ることを考えると、それはあまりぞつとした役廻りとも思えない。

伸子が足をふりふり愚図々々している間に、佐々はそれにかまわず活動家らしい足どりで寢室に行った。間もなく、開け放した扉から、水のばししゃばしい音、髪ブラシを置く軽い乾いた音などが響いて來た。窓からは、宵つばりな都会の眠氣知らずなざわめきと、向い側の建物の屋根の頂に廻っている広告イルミネーションの氣ぜわしい明滅。下界の燈火を反射して、ぼうつと潤いを帯びた黒い夜空の一部が見える。

伸子の胸にいきなり、

「おいてきばりにされては大変だ！」

と云う、子供らしい切ない思いがこみ上げてきた。

彼女は、いそいで椅子を立ち、父の後を追った。佐々はもう髪の手入れもすみ、部屋の真中に立って上着に片手を通してかかっているところであった。それを見ると彼女は慌てて云った。

「すまないけれど一寸待って下さらない？ 私、やはり行くわ」

伸子は足早に鏡の前に行った。

佐々は、時計をみた。

「もうあまりゆっくりはできないよ」

「すぐよ、五分！」

伸子は、迅速に髪をなおし、小さなまるい茶色の帽子をかぶった。

二

丁目がふえるにつれ、人通りが減り、街がさびれてきた。

父娘は、陰氣にブラインドのおりた大きな飾窓について角を左へ曲った。表通りから入ると俄かに暗く、緩く爪先下りになった舗道の

足許さえよくは見えないようであった。行手の大通り一つ隔てた彼方がハドソソ河で、時々鋭い夜の河風が吹きぬけた。リヴァーサイド・パークの葉のない樹木の間に冷たい蒼白さで瓦斯燈がぼんやり灯っているのが見える。

伸子は、寒さと淋しいところへ紛れこんだ気味悪さでと異様な緊張を感じた。彼女は、我知らず強く父親の腕にすがりついた。

「——まるで暗いのね。——見当がおつきになつて？」

佐々は、靴の踵の音をさせて歩きながら、絶えず右側の家並に注意を払い、幾分平生と違ふ庄えつけた音声で答えた。

「もう少し先だろう。——然し、こうどれもこれも同じ形の家ばかりではまいるな。もつと街燈でもふやせばいいのに……」

全く、左右には低い鉄柵と三四段の上り口を持った狭い家の入口が、どれもこれも同じ型で幾十となく並んでいた。舗道のまばらな街燈の光は、一寸奥へ引ッ込んだそれらの質素な戸口まで届かない。彼らは、だんだん侘しく感じながら、ほとんど一軒ごとに薄暗い家の入口を覗いて進んだ。大抵いやになつた時分、彼らの前に一つ明るく灯かけの洩れる弓形窓が現れた。カーテンの隙から、内部にちらつく男の立姿や文句の判らない話声が聞えて来る。——

伸子は、父の腕を引いた。

「ここよ！」

佐々は、外廻りを一通り眺め、入口の段を昇つた。呼鈴を押した。短い、余韻のない音が直ぐ、扉の彼方で鳴つた。伸子は期待と好奇心を感じた。暗い横通りで変な不安に襲われて来たところなので、彼女にはこの古くさい板硝子のはまった扉の一重彼方が何かの暖かさ樂しさを持っていてそうに思われたのであつた。すぐ硝子に人影がさした。檉扉は内側に案内滑らかに開いた。扉をあけた男は、彼らを見ると更に入口を広くあげ、改つた口調で挨拶した。

「よくいらっしやう下さいました。——どうぞ……」

佐々は玄関の間に入るとすぐ外套を脱ぎはじめた。伸子は自分の周

囲を見廻した。右の壁際に鏡つきの高い帽子掛があつた。左側には、葡萄葉の厚肉浮彫のあるベンチが置かれ、その前から二階へ登る緩い階段が見上げられる。奥に重いカーテンで人目を遮つた開け放しの室があつた。その広間から男声ばかりの、圧力が籠つた談笑が響いて来た。その辺一帶頑丈な茶色の檉の円柱や鏡板がつかつかと灯の下で光っているのが、伸子に快適な感銘を与えた。彼女の感覚に新鮮な一種の匂いがその辺に滲みついてた。家具の艶出液のにおい、煙草、羊毛ともう一つ何か乾いた皮製のものから立つようなにおいが皆一つに溶けこんだ、男ばかりの住居らしい匂いだ。

佐々の外套をたすけてぬがすと、扉をあけた男が云つた。

「——ではこちらへ、女の方も沢山来ておられますから……」

伸子は軽く頭を下げる拍子にはじめてその男の顔をはっきり見た。

彼は白い低いカラアと黒いネクタイと黒い地味な少し手ずれた服を着ていた。陰気な顔だが、円みのある大きい顎が目についた。伸子は、階段を登りながら、

「安川さん、来ていらっしやいますか」

と訊いた。

三十五六に見えるその男は、持ち前と見える低い調子で答えた。

「来ておられます」

二階へ登り切ると、一つの部屋の戸が半分開いていて中から女の喋り声が出た。彼は、

「安川さん」

と声をかけた。

「佐々さんが見えました」

中の話声がびたりとしずまった。

「まあ！ そうですか」

声とともにやや前踢みに大股で、鬨の上に安川の姿が現れた。伸子を案内した男は階下へ去つた。安川冬子は、伸子がある専門学校に、僅の間籍を置いていた時、上級の学生であつた。彼女は勤勉な学業の優

れた生徒として誰にでも知られていた。伸子は、一二度口を利いたくらいの間であったが、ここできにかく海の彼方からの友達と云えるのは彼女きりであった。安川は、一年ばかり前からC大学で教育心理学を専攻しているのであった。

安川は、珍しそうにじろじろ伸子を見た。

「噂はきいていたけれど、私は一向外へ出ないから、ちっとも知らなかったわ。よくいらしてね。——いつこちらへ着いて？」

「三週間ばかり前」

安川は、学校時代とちっとも変らない、その変らなさに伸子が驚いたほど同じてきばきした口調で訊いた。

「お父様と御一緒だつて？」

「ええ。腰巾着」

伸子は、自分がこの女性達の前でまるで年少者扱いなのを感じた。

「今夜も下に来ているわ」

「そう。——いいわね。今どこ？ お宿は」

「ブレントホテル」

「ああ、私あすこならいつだったか行ったことがありますよ。——皆さんにご紹介しましょうね、こちらは高崎さん——高師をおでになつて家政学をやつていらっしゃる。この方は名取さん——音楽がご専門——」

伸子は一人一人に向けて克明に頭を下げた。

一通りの挨拶、短い応答が終ると、伸子は失望というか、意外さというか、ぼんやり寥しい心持を感じた。居合せる人の中には一目で何処か好きになれるというような人が一人もいなかった。彼女らは、それぞれ専門もちがいが容貌も違つてはいるのだが、誰でもがしっかりとものらしいところ、物質にも精神にも多忙で絶えず何かに追い立てられているという余裕のない感じ。それらは、うるおいない身なりとともに、例外ない持前であった。伸子は、傍の椅子の上を外套を脱いだ。

一旦透切れていた学校の話、留学生の噂が間もなく甦った。ある人

は、伸子に親切に話しかけた。彼女は愛想よくそれぞれ答えた。然し、心が変に沈鬱になった。伸子は、この部屋をこめている生活の狭い、暢々しない雰囲気が何となく窮屈で馴染めなかった。折角新しい自然や人間の生活の中に入ってきていながら、何も見えず聞かず、友達とよつても課業、課題、いそがしさ、又は、第三者には興味を起しようもない噂しかできない海外遊学生の境遇に、伸子は恐怖を感じた。縛りつけられた感じは、階下の広間に出て伸子から去らなかつた。広間の隅では佐々が機嫌よく安楽椅子に納まり、しきりに何か喋っている。

入口に近いカーテンの傍の柱によりかかり、腕を組み、先刻彼女を二階まで案内した男が、もう一人の椅子にかけた男と話していた。椅子にかけている男の膝には、場所柄になく白と黒との斑猫が一匹丸くなって抱かれていた。この男は打ち寛いだ風で、その猫の背を撫で撫で物を云っている。家庭的な光景で、彼女はいい心持がした。伸子は、隣りに坐っている中西という、おそく来た、美しい、情の籠った声で物を云うひとに、その男の名を訊こうとした。

すると、先刻の男が大柄な骨っぽい体をぎごちなく運んできて彼女のじき前にあるテーブルの横に立った。彼は、テーブルの端で埃でも払うような手付をすると、低い声で、

「今晚は——」

と開会の辞めいた挨拶をしはじめた。困りの幾つかの顔が声の方へ振り向いた。広間じゅうのざわめきがしずまった。森とした寄木の床の上で誰かが椅子をずらせた。——改つた咳払いの音がする。……

男は、伏目になったまま、平凡に多数の人々の集つたことに對する満足の意をのべ、松田博士の歓迎の言葉と紹介とを終つて席についた。松田博士は、懇篤そうな中老人であった。彼は自席に立つて、座談的に芸術の郷土的特質という見地から、亜米利加の絵画についての觀察を話した。

話しては、やや囁がれた平坦な音声で、常識的に話を進めて行く。

伸子の興味は、又程なくそれに物足りなさを覚えてきた。彼女は、話をききながら、向い側に並んでいる男達の顔を見較べはじめた。大概の男は広間の右側に立っている博士の方に頭を振っているので、伸子のところからは沢山の顔の左半面だけが見えた。艶々した血色の上瞼の眼れぼつたい凡俗な顔、皮膚が黒ずんで目鼻立の粗い、恐らくは口中が臭そうな容貌、又は、頬から口の辺にかけて肉の薄い、粘液質らしいすべすべした皮膚の持ち主。——ちよつとした脚の置き方や、椅子のもたれ方がみな何処か隠れた性格の一部を現しているようで、伸子はこの見ものを面白く感じた。正面から見た時は、伶俐そうに引緊っていたある青年の顔が側面から見るとまるで魯鈍さを暴露し力弱く見えた。——伸子はふと平生あまり見たことのない自分の横顔について微かな不安を感じた。順々にわたって、彼女と斜向いになっているさっきの男、名も仕事も知らない中年の男の番が来た。

彼は椅子の奥に深く腰を落してもたれ、癖と見えてしつかり胸のところへ腕組みをして、うつむき加減になっている。先方から見られる心配ない一瞥を与えながら、伸子は微かな戸惑いを心の隅に感じた。彼の横顔には、これまで見てきたどの男達にもない何かがあった。ほかのどの男でも、容貌と軀とは同じ力の密度——つまり胸のところにあると同じ血や肉でひとつくろみにできていると感じられるのに、この男ばかりは肩幅のひろい北国人風な体つきと、その上のにのっている顔との間に、妙にちぐはぐなものがあった。足許から同じ力を入れてずつと見上げていくと顔へ来て急に視線が間違つてくような複雑なもの——地味さ、感傷的なもの、心持がのびやかに外部に発しきらず内攻しているという印象を与えるものなどが、陰翳となって、下唇の引緊った蒼白い横顔にはびこっているのであった。

伸子の視線は二度後戻りをした。彼女の好奇心が、その陰気な横顔にむかって動いた。彼の顔にあるものは、決して多くの人々の持っているような得意な男の快活さでもなければ、雄々しさでもなかった。何か陰のものであった。それは暗さに近い。視るたびに、その陰翳は

何処から来る何物なのかをひどく知りたい心持を起させる種類のものなのだ。

松田博士の話は終わった。

あたりには以前より打ちとけた談笑が起った。廊下の方の扉が開き、アイスクリームや砂糖菓子が進びこまれた。すると、伸子が好奇心を持った男が再び立った。そして新しい顔ぶれもあるから、順ぐりに自己紹介をしたらと思うがと提議した。そういうことの大嫌いな伸子は、思わず救いを求めるように遠方の父親を見た。父はその申し出がさも愉快そうに、愛嬌のよい微笑を眼尻の襷にたたんで晴れ晴れと坐っている。

「それでは——請う隗より始めよということがございますから、失礼して私から申し上げます」

彼は、佃一郎という姓名であった。C大学で比較言語学を専攻し、古代の印度、イラニアン語をやっているのだそうだ。国は裏日本で、研究の傍、Y・M・C・Aの仕事を手伝っていた。彼は、「私でできますことはできるだけ御相談にあずかりますから、どうぞ御遠慮なくおっしゃって下さい」と結んだ。

古代語の研究と、極めて実利的なY・M・C・Aの仕事との間に、どんな心持の上の必然なつながりがあるのだろうか。伸子は腑に落ちない気がした。が、彼の専門の題目は漠然とした満足を彼女に与えた。彼の顔に現れているものとその研究との間に性格的な関係をもつ何ものかを感じたように思ったのであった。

後から立った者は、ほとんど皆、政治、経済、社会学、法律等が専攻であった。猫を抱いていたのは、沢田という植物学を勉強している人であった。女達も、各々抱負や目的を手短かに述べた。伸子は極りわるさからぶつきら棒にただ、「佐々伸子と申します。——よろしく」と云っただけで坐った。彼女はこれらの人々を前に置いて、自分は深い人間の生活を知りたいのだ、死ぬまでに一つでも、よい小説が

書きたいのだ、と告白する勇氣をとでも持ち得なかつたのであった。親娘は、十二時少し前にホテルに帰った。

伸子が湯上りの部屋着で、昼間買つて来た細工のよい銀製の封蠟道具をいじくっていると——それは欧州戦争の第五年目で、毎日処々に赤十字や戦地慰問のためのバザーがあった。伸子はその一箇処で、古風なその道具を見つけてきたのであった。——寝衣に更えた佐々が来つて、

「明日の朝九時に佃君が来るから覚えていておくれ」と云つた。

「佃さんて——今夜の？」

「うむ。——頼まれて来た南波の甥のことがどうも氣になるがとて一人でやっていられないから、あの人にも手伝つて貰おうと思つてね」

佐々は、大まかに云つた。

「あの男はこちらに大分永いらしいから、きつと何か手がかりを見つけてくれるだろう。案外、いやその人なら知つていふところがあるところがないでもあるまい。……こんな人間うじやうじやいるところ、何年も行方不明の男一人見つけようとするのは、何しろ一仕事だ！」

そして、

「早くお前もおやすみ」

彼はいかにも活動の後の睡眠を愉しむ風でさつさと寝台に入った。

### 三

次の朝、伸子はいつもの通り元氣を恢復し、爽やかな氣分で目覚めた。寢室のカーテンはまだ閉じたままであった。カーテンの僅かな隙間から、一本の震える細い金線のような光線が薄暗い部屋に射しこみ、化粧台の上の白粉壺に小さい燃える炬火のような閃きをつくつてゐる。

彼女は、静かな氣持でかけものをはねのけて起き上つた。伸子は、

首をのびし、彼方の寢床を眺めた。父は先に起きてしまつたと見え、床は空であつた。

伸子は、枕許の時計を見た。九時半になつてゐる。彼女は、忽ち昨夜の約束を思い出した。

彼女は、部屋着を羽織り、窓をあけた。今日もよい天氣だ。少し霽つぱい空で、朝日が暖かく十月下旬の街路や建物に輝いてゐる。伸子は、格別急ぎもせず顔を洗い、髪を結び、衣服を更えた。彼女は昨夜と同じ、白絹のカラアのついたさっぱりした紺の服で広間へ下りて行つた。

朝の広間は澄んで清らかで、大理石の円柱や熱帯植物の鉢植が、埃一つない空氣の中に納まつてゐる。

伸子は、人影疎らな広間を見渡した。食堂の入口に近い長椅子に並んで、父と佃とが話してゐる。彼女はまっすぐそつちへ行つた。

「やあ、起きたね」

彼女は父に朝の挨拶をした。そして、彼女のために、椅子を引きよせた佃に、

「ゆうべは失礼いたしました」

と云つた。

「私こそ失礼いたしました。お疲れになりましたらう」

佐々は佃とは、すぐ話を元に戻した。彼らは、南波武二を尋ねる廣告を日本字新聞に出すこと、佃が市の宿泊所の名簿を調べることなどを定めた。

傍で二人の話を聞きながら、伸子は佃がここへ来ても、昨夜彼女の目についた雰圍氣を顔や声に持つてゐるのを感じた。その上こうやつて相對してゐると、彼には、彼女の広い、漂つてゐる情感を引きまゝとめて、狭く何処かに引きつけるようなところがあつた。その引きつけられるように感じるものは何なのか。外面的なものでないのは明かであつた。彼の服装は、朝のはっきりした光の中で昨夜にまして氣が利いても見えなければ、上等でもなかつた。むしろ貧しげであつた。容

貌にしろ、それは美しき男性という範疇から遠いどころではない、燈火の反映の下で見たより一層陰気であった。それなのに、何故か彼は伸子に好奇心を起させるものがあるのであった。――

話が一段落つくと、佐々は、

「どうです、一緒に茶でも上りませんか。――実は我々もこれから食事をするところですから」

と佃を誘った。

佃は、一旦辞退したがテンプルについた。伸子は、彼から、日本から来た労働者が浮浪者になる経路や賭博狂のある男の話などをきいた。佃は話下手であった。自分から話題を展開させる性質の男でなかった。彼は、教室に出る時間の都合があると云って、間もなく中座して帰った。

伸子は、十一時前に下街に行く父とホテルを出て、一緒に地下電車の停留場まで行った。そこで別れ、彼女は自分だけ、徒歩で美術館に行った。

土曜、日曜以外館内はひっそりしていた。右のとっつきに、ロダンの作品ばかり集めた一室があった。レムブランドの「花を持てる女」の前で、イタリー人らしい一人の男がそれを模写していた。彼は熱心に、美術家らしくブラウズを着た背をかがめ、原画と自分の画面とを見較べ見較べ細心に、神秘的な原画の素晴らしい色調を出そうと努めているのだが、伸子の眼に彼のカンヴァスは醜怪以外の何ものでもなく映った。ある場所では雑誌の表紙にでも応用するのか、亜拉比亞人が槍を振って躍り上る黒馬に跨っている絵を、石版刷のようにはっきり写している中年の女がいる。伸子は、軽い昼飯を階下の喫茶店で少しあちこち歩き廻った。

もう帰ろうという時、彼女は急にあることを思いつきもう一遍階上へ引きかえした。しばらく迷ったあげく、番人に訊き、伸子は一つの人気ない陳列室に入った。そこは古代波斯の美術品や写本などの陳列室なのであった。

これまで、大ざっぱに土耳古系統の美術品として好んでいた精緻な唐草模様銀細工、絨毯、碧と黒との釉薬の対照が比類なく美しい陶器などが、皆イラン人の製作であったのに伸子は驚いた。彼女は、特に、入って突当りの広い壁に懸っている裝飾瓦に異常な懐かしさと興味とを覚えた。貴人行業の図で、花の咲き満ちた春の樹下に若い貴族の男女が語っている、侍女が彼方から裳を春風に吹かれながら酒瓶を捧げて来る楽しげな構図だが、王女の下服れた豊かな頬と云い、大どかな眉と云い、領巾をかけた服の様子と云い、所謂天平時代の風俗そっくりであった。そればかりではない。一面に咲き乱れた花の愛らしい形から、樹木、飛んでいる鳥の形、しかもそれらを彩るたっぷりした釉薬の黄、紫、緑、碧の見覚えある配色に至るまで、寧楽朝の美術を回想させずには置かないものがある。

伸子は、体が熱くなるのを感じた。せわしく心の中で波斯、中国、日本と連想が飛んだ。――しかし、直ぐその三つの間に正しい連絡を見出そうとするに伸子の東洋美術史はあまり貧弱であった。

彼女は、なお当惑と物好きの現れた眼つきで、幾つものガラス棚ののっているところや、狩猟の絵がある。余白に記録らしい文字があった。けれども、朱や金で裝飾された、模様のような文字は、絵がなければ伸子にはどっちが上か下かさ見え見わけのつかないようなものであった。彼女はこつこつ美術館の数多い石段を降りながら、あんな文字を佃が本当に読むのかしらと怪しみおどろいた。

土曜日に、伸子は父と朝から郊外の知人を訪問に出かけた。

三時過ぎに市中にかえって来たが、佐々は夕刻まで下街で用事があると云うので、伸子独り先にホテルへ戻った。昇降機の方へ行きかけると、誰かが彼女の名を呼んだ。振り返ると、素はしこそうな、そばかす顔のベルボーイが駆け来て切口上で報告した。

「お客様です。丁度今いらっしゃって彼方に待っていらっしやいます」

伸子は、誰だろうと思いつつ広間に戻った。見ると、昨日の朝と同じ食堂の入口に近い隅に、佃が来ている。彼の用向きは直ぐ察しられた。彼が、自分のところと定めたように一つの場所を占領しているのが、伸子に何となく彼の地道さを感じさせた。伸子はくつろいだ気分であつた。

「今日は——。父はまだ帰りませんが、私で分りますこと？」

伸子は彼と向って座をしめた。

「きのうお頼みを受けた新聞広告を出すようにして来ましたから、その受取を差し上げようと思ひまして——」

「そう、どうも有難うございました」

伸子は渡された紙片を一寸見て手提てまりの中なかにしまった。佃はその手元を見守りながら云った。

「それから——今朝ミルス・ホテル——お話した市営宿泊所ですが、あすこへも行って見ましたが、近頃の帳面にその名は見当りませんでした。……三月分出して貰ってよく見たのですが」

「まあ、そんなにいちどきにして下さらないでもいいのに」

伸子は、彼がどうしてそんな時間を持っているか驚いた。

「うちの父はああいういそがしがりやだから、願う時は大急ぎにごたお願ねがいするけれども、貴方あなたは、ゆっくり、お暇な時して下さればいいのよ」

「いいえ、かまいません。きのうは午後すつかり空いた日ですから——ではどうぞお父様がお帰りになりましたら、新聞にはたぶん明後日広告が出るとお話し下さい。——ミルスの方へは、また二三日うちに行つて見ましよう。少し心当りもありますから……」

「どうぞよろしく」

——けれども、何となくこれぎりきりで立ち上り、左様さまならと云う気がしなかった——佃も、いそがないと見え、傍の小テーブルに置いた帽子や手袋をとりあげる風も見えない。伸子は、やがて、

「貴方のやっやつていらっらししやるイラン語イラン語というの——まるで不思議なも

のね。きのうメトロポリタンに行つたので覗のぞいて見たけれども、私にはどっちが頭かぶだか尻尾おしりだかまるでわからなかつたわ」

と云つて笑つた。佃も頭を振つて笑つた。その笑顔は、静かな湖に漣さざなみが拡がって行くようであつた。彼は、

「どんなのを御覧になりましたか？ 巻物ですか、それとも石刷りですか」

と訊いた。

「ガラス棚に入っている巻物——絵のあるの。——波斯人は今でもあんな字を使つていますの？」

「——字は大して違いますまい。言葉の方は昔から大分違つて来ていますが——字でも、大昔はあんなのでない楔形文字きさぎなを使つたのです——」

伸子は、興味にひかれて佃の顔を見た。

「そんな字で、どんなものを書いたんでしよう。記録や何かばかり？」

「いいえ！」

佃は、力強く否定した。

「史詩や物語も沢山あります。——もつとも、ずっと昔、その楔形文字きさぎなの時代は、王がほかの民族を征服した短い記録のようなものが巖いわなにかに刻まれたものばかりですが——」

伸子は、話わに身が入るにつれ、飾りつけなく、率直に口を利くようになつた。

「字がだんだん複雑になり殖ふえるに従つて、種々な物語が書けて来たというわけね。——どんな風な話が多いのでしよう……どんな氣質きせきが現れていて？ 書いたものに——」

「——さあ」

佃は考かんえて黙つた。そして、どしどし話さないで、少し伸子をもどかしがらせたのちに云つた。

「——大体から云つて悲觀ひく的でしようね」



「人間を悲観しているの？——それとも時代の境遇を不平に思うの？」

「あの国民は、昔から種々な民族にじめられて来ていますから、政治的に苦しんでいるのが多く原因しているでしょう」

「——」

仲子は、彼の専門が学術上を持つ価値や、研究のめざしている目的などを訊ねた。比較言語学は面白く彼女に思えた。民族の心理や社会組織、文明の消長と切っても切れない縁のある、活きた総合的な研究の一分野として興味をそそるものなのであった。彼は決して迷惑ではないらしい様子で、丁寧に、しかし何処やら言葉足らずに仲子の訊くことを説明した。彼は小さい手帳を出し、現代文字の標本を書いて見せたりなどした。

彼らは、二時間近く話した。彼はやがて見舞う病人があるからと云って立ち上った。

「——日本人の方？」

「ええそうです。もう大分いいのですが、毎週一遍ずつ行ってやることにしているの待っているでしょう」

丁度その頃、ほとんど世界じゅうに瀰漫して悪性の感冒が流行していた。紐育市中でも毎日夥しい患者が脳や心臓を冒されて死亡した。独逸の潜航艇が、合衆国の沿岸へ来て病菌を撒いて行ったなどという評判さえあるのは、仲子も新聞で知っていた。

彼女は佃に笑いながら云った。

「お見舞いはいいけれど、ご自分で貰っていらっしやらないように」

すると、佃は案外真面目に云った。

「私はたぶん大丈夫でしょう、三四カ月前に種々な予防注射をしましたから」

「まあ、どうして？」

「Y・M・C・Aの方から、仏蘭西へ行くことにしてすっかり準備した時させられたのです。チフスや猩紅熱の。——だからうつりますま

い」

彼は、重々しく云いながら、テーブルの上から老書生らしい古くさい山高帽をとりあげた。

「それに、ああいう病気はこちらの心の持ちようです」

どうして戦地へなど行く気になったのかと訊きたく思った。仲子に何の説明も与えず、佃は丁寧に挨拶して、ぎごちない足どりで人ごみの間に隠れた。

仲子は部屋に帰った。

閉め切ったあった部屋には、午後の穏やかな斜光とともに、むっとするいきれがこもっている。彼女は窓を広くあけた。そして、帽子をとり、外套を脱ぎ、先ず一休みという心持で、長椅子の上に横たわった。彼女の両手は組合わされて頭の下にあった。その下にクッションがかさなって柔かく心持よく押しつけられている。脇かけの部分が高いので、長椅子は彼女の眼のところ程よい陰翳を与えた。暖かい……室内は絶対に物音せず、わずかに、開いた窓から気にならない程度に市街のどよめきが流れて来る……神経を撫で和らげられるので、仲子は眠いようになった。けれども、彼女は寝入りはしない。うっとりした眼をあけ、閃きのない老いた午後の日光の遊んでいる白い天井や小枝模様の渋い壁紙の上を眺める——考える。なぜなら仲子の心から、佃の古くさい黒い山高帽はまだ消えていない。……

佃に会い、彼と話すのは、仲子にとって興味でないことではなかった。旅行に出るから、彼女はそんな種類の話をする機会もあいても、佃に会うまでは持たなかった。佃の専門の研究について種々新しい話を聞くのは面白いのだが——仲子は考えた。彼はなぜあ特別な印象をひとに与えるのであろう。彼は、まるで流行に反抗でもするように、猶太人の爺がかぶりそうな古びた山高帽を放さない。その山高のような特別さ、淋しいような満ち足りていないような何かが仲子の心をひくのであった。彼がもう若くないのに貧乏しつつそのような研究をし